

「海」の復権をまちづくりの核に 港湾都市を生かした活性化

瀬戸内国際芸術祭2016の開幕

平成22年に創設され、以後3年ごとに開催されて国内外で評価を高めた現代アートの一大フェスティバル「瀬戸内国際芸術祭2016」(主催・瀬戸内国際芸術祭実行委員会)が、3月20日に開幕した。会場は直島・小豆島をはじめとする瀬戸内海12の離島および、それらの離島への主要玄関口となる高松港(高松市)周辺、宇野港(玉野市)周辺の計14カ所だ。

会期は春会期(3月20日～4月17日)、夏会期(7月18日～9月4日)、秋会期(10月8日～11月6日)の3会期に分かれるが、3会期すべてで会場となるのは8島および高松港周辺・宇野港周辺である。

会場のほとんどは主催者でもある四国側の香川県に属しているが、後に述べるように、特に近代以降の瀬戸内の海上交通は宇野港と

高松港の存在を抜きには語れない。「海の復権」をメインテーマとする瀬戸内国際芸術祭でもそれは同様で、宇野港・高松港と各離島の港、そのほかの小さな港湾が現代アートを通じてネットワーク化されているところに、この芸術祭の命脈の一つがある。

瀬戸内国際芸術祭は作品展示だけでなく、会場ごとに個別のテーマ事業が展開される。玉野市の宇野港周辺では、会期中に宇野港「連絡船の町」プロジェクトの展開、およびJR宇野駅や宇野港を生かした各種のプログラム、イベントを実施していく。3月20日の開幕日には早速、宇野港「連絡船の町」プロジェクトの一環として昨年1年間を掛けて募集した「第1回『撮り船』フォトコンテスト」の表彰式が、宇野港の特設会場において、審査員を務めた椎名誠氏(作家)、織作峰子氏(写真家)の出席の下に行われた(審査員は写真家・大西みつぐ氏を加えた3人)。

さて4月5日に主催者から発表されたデー

タによれば、3月20日～4月2日までの来場者数は、計約12万4000人で、平成25年の前回より約1万7000人増えている。前回は最終的に延べ107万人が来場したので、今回も延べ100万人以上の来場者が期待される。それにしても計108日の会期で、人口が少ない12の離島(数百人から数千人がほとんどで、最大が約3万人の小豆島)に延べ100万人以上の人々が訪れるのだ。おしなべて道が狭く、面積も狭い各離島のにぎわいぶりは、相当なものになるはずだ。

「玉野市・宇野港は第2回目から会場とし



くろだ すすむ
黒田 晋
玉野市長



「瀬戸内国際芸術祭2016」オープニングイベント(宇野港周辺)

て正式参加しました。第1回目は島々(特に主要会場の直島・小豆島)への本州側の玄関口という形での、作品展示を伴わないオプザーバーとして参加させていただいたのですが、岡山駅からJR宇野線で宇野港にいらっしやったお客さまの行列や数の多さには、思わず度肝を抜かれました(笑)」

そう語る黒田晋玉野市長は、宇野港に続き押し寄せる人波を見て、離島や港湾を舞台にしたアートフェスティバルへの現代人の関心の高さ、換言すれば「癒しの空間と体験」を希



「第1回『撮り船』フォトコンテスト」表彰式(宇野港)

求する思いの強さなどを改めて痛感したという。加えて「『海の復権』という瀬戸内国際芸術祭のスローガンに強い共感を覚え、第2回目からの正式参加を決めた」と続ける。瀬戸内国際芸術祭の公式サイトは「海の復権」というテーマについて、大要、次のような説明を行っている。

瀬戸内海では古来、行き交う船が島々に立ち寄り、常に新しい文化や様式を伝え、島々の固有の文化とつながり、伝統的な生活スタイルを醸成してきた。しかし、グローバル化や効率化、均質化の流れの中で島々の人口は減少し、高齢化や活力の低下が進んで島独自の固有性は失われつつある。瀬



白砂青松の砂浜が1kmつづく渋川海岸



宇野～高松航路唯一の定期船・四国フェリー

戸内国際芸術祭は、そうした瀬戸内海の島々に活力を取り戻すとともに、瀬戸内海が地球上のすべての地域にとつての「希望の海」となることを目指す――。

港湾都市ならではの活性化の形

「宇野港と高松港は明治43（1910）年から始まった宇高連絡船の発着港として、昭和63年に瀬戸大橋が開通するまで四国への玄関口、本州への玄関口として機能してきました。同時に離島航路もたくさん便数が発着して、近代の瀬戸内文化を形成する軸になっていたという自負と誇りが、地元に生きてきた私たちにはあります。瀬戸内国際芸術祭の



第1回目の瀬戸内国際芸術祭で設置されて以来、毎回進化を加える人気作品「宇野のチヌ」(宇野港)



イタリア人デザイナーの手でJR宇野駅もアート作品化(2016年3月)

『海の復権』というテーマは、私たちのそうした思いにピッタリきます。芸術祭で得られる経済的効果への期待もさることながら、さまざまに閉塞した社会状況においては、再活性化の道を探るための精神的なよりどころにもなり、壮大な夢を抱かせてくれる言葉、理念だと考えています(黒田市長)

宇高連絡船はかつての青函連絡船と同様、海を越えて鉄道をつなぐ鉄道連絡船だった。青函連絡船が青函トンネルの完成で消えたのと同じ昭和63年、宇高連絡船も本四架橋の先陣を切る瀬戸大橋(JR瀬戸大橋線)の開通で、鉄道連絡船としての役割を終えた。以来、青森駅が北海道へ延伸した鉄道路線の「途中駅」になった一方で、宇野駅は四国への中継

駅から「終着駅」になった。

「その先はもうないのが、陸上交通での鉄道の終着駅や道路の終着点です。しかし、鉄道連絡船の発着港の役割は終えても、相変わらず宇野港と高松港は四国フェリーで結ばれています。小豆島や直島などの離島航路も健在です。さらに海は瀬戸内だけでなくその先、大げさにいえば地球全体の海とつながっている。宇高連絡船が消えてもうすぐ30年。人やモノの流れはその間に大きく状況を変えました。私たちが港湾の周辺に生まれ育った人間には世界に開けた海がある。その自明の事実を持つ、いろいろな意味での可能性と夢を、瀬戸内国際芸術祭はわれわれに再認識させてくれたのです(黒田市長)



宇野駅そばの広大な倉庫を活用したアートスペース「駅東創庫」

玉野市

市 政 ル ポ

(岡山県)



瀬戸内の多島美が眺められる駅東創庫に隣接する天然温泉「たまの湯」

瀬戸内国際芸術祭への参加は、玉野市の長年の懸案であった中心市街地の再生および魅力づくりへの動きをも活性化させつつある。玉野市の中心市街地は宇野駅と宇野港、市役所などが集まる宇野港エリア全域。玉野市では平成24年度から「玉野市中心市街地活性化計画（都市再整備計画）」に基づく中心市街地の再整備を本格化させているが、同年に瀬戸内国際芸術祭に正式参加するようになったことで、中心市街地への現代アートの設置・保存が進むようになった（地元のゴミや廃材を使った作品『宇野のチヌ』は平成22年に設置）。また港に面した建物の外壁（ビルボード）には写真作品を掲示し、道行く人の目を引いている（今年3月までは写真家・荒木経惟氏の作

品、4月から「撮り船（とりぶね）フォトコンテスト」の入賞作品を掲示）。

さらに今回の瀬戸内芸術祭期間中は、金工作家が作ったアートレンタルサイクル（放置自転車車をアート化）を港で貸し出すなど、刺激のかつ遊び心に満ちた試みも行われている。

民間事業者も芸術祭を契機に、活発な動きを見せ始めた。宇野港に面した駅東地区の広大な旧国鉄用地（5.1ha）の隣接地に、第1回目となる瀬戸内国際芸術祭開催の年に設置された「駅東創庫」は象徴的な存在だ。空き倉庫を活用し、現代アートの作家たちにアトリエとして格安に貸し出している。駅東創庫には約10名の作家たちがアトリエを構え、公開日にはアート好きな人々が集い、旅行者にも新名所として認識されつつある。

第2回目となる瀬戸内国際芸術祭が開催された平成25年3月には、日帰り天然温泉施設「たまの湯」が旧国鉄用地に開業した。港に直面した立地条件を活用し、絶景の温泉や地魚などのグルメを特徴とする癒し空間を現出させることにより、芸術祭などで宇野港を訪れる人々を引きつけようとのコンセプトで成功を収めつつある。

さらに中心市街地には、地元食材や港まち特有の癒しを感じさせる環境を活用したコンセプトの飲食店の進出などが目立ち始めている。瀬戸内国際芸術祭で再認識された「玉野の宝物」が少しずつ、新たな活性化の種として具現化されつつあるといえるだろう。

図書館移転と病院再生で街なか活性化

少子高齢化や経済的な要因などによる人口構造の変化は、全国の大都市に多くの共通課題を生み出した。大きな課題の一つである中心市街地の空洞化現象は、決定打の見つからない問題であるが、玉野市では瀬戸内国際芸術祭の好影響も取り入れるような形で、前述のように活気を取り戻しつつある。同様に人口構造の変化とともに地方都市を悩ませている問題の一つに、図書館などの公共施設や、公共病院（市民病院）などの再整備問題がある。玉野市も現在、市立図書館および中央公民



ショッピングモール「メルカ」内に設置された「たまのミュージアム」



造船のまち玉野では進水式も身近なイベント

館の移転・整備計画と市民病院の経営改善問題が重要な懸案となっている。議論百出の状況がある一方で、だが黒田市長はいずれの問題にも明確な方向性を打ち出し、粘り強く着実に推進しようとしている。

「玉野市で

しています」
(黒田市長)

この方式で事業を実施すれば、市の整備にかかる費用は6億円程度で済む。それだけでなく、郊外への大型ショッピングモールの乱立などで売り上げが低下しつつある中心市街

地の商業施設の活性化、新たな人の流れが生まれることによる中心市街地全体の活性化にも寄与することが期待されている。

「公共図書館や公民館の利用率は例外を除けばかなり低いのが実情です。そのことを問題視する人も少なくありませんが、鉄道駅と旅客船の発着港に近い中心市街地の商業施設にそれらの施設を集約することは、かなりのメリットがあると考えています。指定管理者については図書館流通センターなどの共同企業体（TRC玉野）で決定していますが、図書館・公民館本来の機能に加え、私は老若男女が集える交流の場として運営されることを期待しています。世代を超えた『井戸端』のような場所になればいいと思っています」(黒田市長)



話題の人気Sea級グルメ「たまの温玉めし」

かつて全国の町内にあった井戸の周囲（井戸端）は、住民の情報交換の場だった。現代はそんな「場」が極端に減り、特に高齢者の集う場が失われつつある。黒田市長は新たな図書館・中央公民館の一体的施設に、そうした機能を加えたいと力説する。

「市民病院もそうです。岡山県は全体的に高度医療を提供できる大病院、総合病院などが非常に多い。玉野市は救急車で30分圏内に高度急性期病院に行ける立地にあります。そして市民病院の役割は、機能的にも精神的にも高度医療を提供できる病院とかけ離れた医との間をつなぐ存在であるべきだと考えます。市民が気楽に訪ねられる気さくな場でもあるべきで、高齢者が溜まりたかつたら、むしろ溜まればいいと思っていますのです（笑）」

は市立図書館と中央公民館が、中心市街地の一角に建つ総合文化センターに入っています。図書館は利用率の低さが問題視され、総合文化センターの建物自体も老朽化に伴う耐震化問題、さらには使い勝手の問題などがありました。新築すれば手っ取り早いわけですが、それには数十億円単位の予算が掛かります。そんな中、市役所に隣接する商業施設《メルカ》の所有者から公共施設の移転・整備を条件に、商業施設の2Fフロアーの一部の無償譲渡の話が持ち上がりました。市ではそのスペースに図書館と中央公民館を一体的に集約化し、指定管理者制度を活用して運営の効率化、利用状況の大幅な改善を図ろうと



玉野市を象徴する大イベント「たまの・港フェスティバル」(玉野市のイメージキャラクター・ののちゃん和日本丸)

また「海の復権」という意味では、玉野市が開始した「連絡船の町プロジェクト」の今後楽しみだ。世界中の連絡船にまつわるアーカイブ情報や新情報を収集することのことが、その蓄積されていく記録やエピソードの数々は、まさに港湾都市・玉野ならではの文化的業績になることが予測される。それらが再整備された新図書館において、一つのコーナーを形



市民の足となっている「シーバス」(一律100円)と「シータク」(一律200円)

陸の船が港をつなぐ玉野市街

瀬戸内航路の主要発着港・宇野港を持つ玉野市は造船産業の集積地でもある。高度経済

(黒田市長)

玉野市ではそうしたコンセプトに合致した運営が可能な徳島市の医療法人と、職員の身分問題なども考慮した上で「玉野市における地域医療改革のための包括協定」を結んだ。それは「市民に安定した医療を遅滞なく提供することは、行政の優先順位としては最上位にあるテーマの一つ」(黒田市長)との認識からであり、玉野市は包括協定という形で市民病院の早期整備、再スタート(平成28年4月1日)の道を決断したのだ。

平成29年4月の開館を予定している図書館・中央公民館の運営とともに、玉野市民病院の今後が注目される。

成長時代に比べれば規模は縮小したものの、今も三井造船など造船関連企業が集まるモノづくりのまちであることに変わりはないが、市内にはなぜか造船を学べる学校がなかった。そこで黒田市長は、「市立玉野商業高校に造船・機械系の学科の増設をすることを視野に入れていく」という。「三井造船など地元企業の若手人材不足や、高校自体の競争力を高める意味でも造船・機械系の学科増設は意味があると考えています」。まずは、市内の高校での製造業のキャリア教育に力を入れることを目的に、市内高校の1年次の授業から入門編の「ものづくり体験塾」を取り入れるとともに、2年次には選択制で製造業のインターンシップを実施していく予定だ。この取り組みにより、地元への就職希望者数や定住人口の増加が期待されることとあり、モノづくりのまちとしての人材育成はこれもまた「海の復権」の一環といえるだろう。

成する日が待ち遠しく感じられる。

ところで玉野市内には現在、乗車料金100円のシーバス(コミュニティバス)とシータク(乗合タクシー)(シータクについては、高齢者と若年層以外は乗車料金200円)が運行され、車を運転しないあらゆる世代の人々の便利な足になっている。そのシーバスとシータクの乗り場マップや運行ルート図を見ていたら、瀬戸内国際芸術祭公式パンフレット掲載の、宇野港・高松港からの各離島会場へのアクセス図と雰囲気が似ていることに気づいた。公共施設や商業施設、病院などは港で、シーバス・シータクという「陸の船」たちが港々をネットワーク化している。「海が常に市民の生活とともにある玉野市」(黒田市長)のDNAは、街なかにもさりげなく伝えられているようだ。

(取材・文 遠藤 隆/取材日平成28年3月1日)